

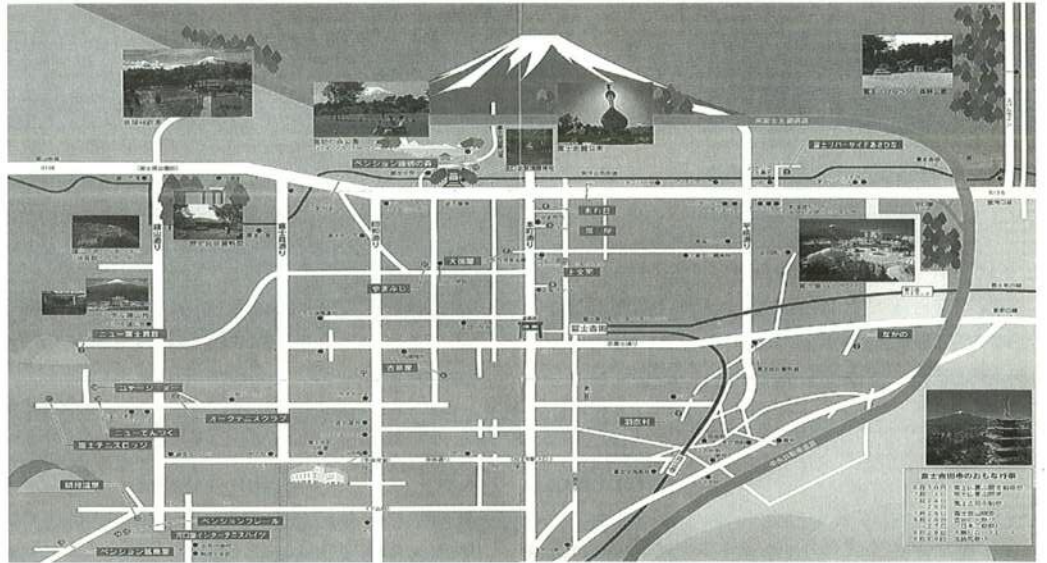


MARUBI

富士吉田市歴史民俗博物館だより

13

1999.9.30



(「ふじよしの宿」／富士吉田市観光協会)

富士吉田 あれこれ

富士山はランドマーク

私たちは日常生活において自分自身の現在地を確認するときに何らかの目標物として目印を無意識的に設定しているものです。それは駅であったり山や川などであったりするので、地域によって当然のように相違がみられます。都心では立ち並ぶビルや入り組んだ道路など目印として設定する対象が多すぎるため自分の位置や方角を特定しづらいことがあります。

富士吉田市は東に道志山地、西に御坂山地に囲まれた富士山の北麓に広がる町で、富士山の裾野の長い傾斜地に市街地が展開する地形となっています。そのため、富士山を生活の指標つまり、ランドマークとしてとらえることが多いようです。富士山を軸に、東西の両山地を背にすることによって、ほぼ現位置と方角を特定できます。

富士山を指標としていることの一例としては、方向の概念に大きな違いがみられることです。南北の道路は、長い坂道になっているため、左右の概念よりも「上(カミ)・下(シモ)」、「上り・下り」で考えていることがよくあります。市内の道路は傾斜の少ない横道(東西方向)と南北の縦道で構成されており、横道から縦道に右・左折する際は、上るか下るかという考え方をしています。ガソリンスタンドなどで誘導してもらうときは、左右ではなく

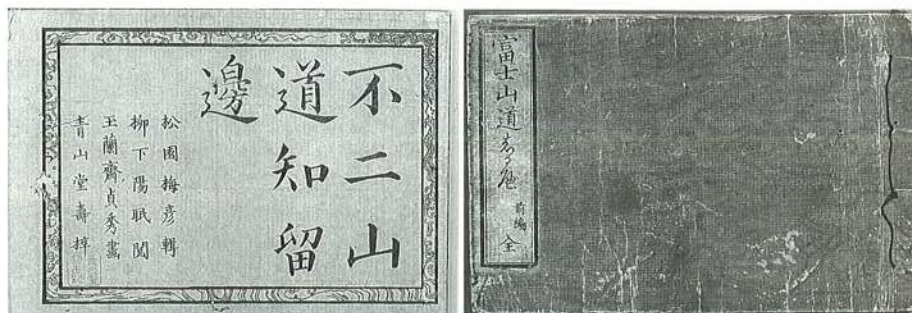
上に行くか下に行くかと聞かれます。このようなことは新聞広告に使われるチラシの案内図に顕著に見てとれます。地図は通常、北を上にして作成されますが、市内の広告チラシの案内略図では、おおむね南に、位置する富士山の麓に展開する市街地を図化する際に、南を上にして上端部に富士山を書き入れる図を作成しています。このように南を上にして略図を書くところは、地元の店舗のものが多く、全国的なチェーン店などの大型店舗では通常の地図作製上の決まりに従い、そのほとんどが北を上にして図化しています。同様に富士山の南に位置する静岡県側の富士宮市や富士市などの岳南地域では文字どおり地図の法則に従って富士山を上位に描けるために整合性のある地図となっています。

富士山の北麓にあたる富士吉田市において、富士山は日常生活の上で毎日仰ぎ見るものであり、常に正面に対峙するという感覚があります。北を上にした地図を見るということは、富士山に背を向けて自分の立つ位置を確認することとなり、ある種の違和感を覚えます。このことは、富士吉田市が信仰の町として富士山を仰ぎながら暮らしてきたことを端的に示すものであり、潜在的な富士信仰の姿がそのような地図からも見て取れるのではないのでしょうか。

▼博物館レポート

『富士山道しるべ』を歩く(前)

はじめに



『富士山道しるべ』／万延元年（1860）

富士山の登山口の一つである吉田口は、御山登拝の富士講中によって大いに賑わったところである。

富士講六世の食行身禄は、信徒の登山本道を北口と定め、吉田御師宿坊を山もとの拠点とした。それ以降、北口は隆盛となり、登拝のための案内書が数多く刊行されるようになった。

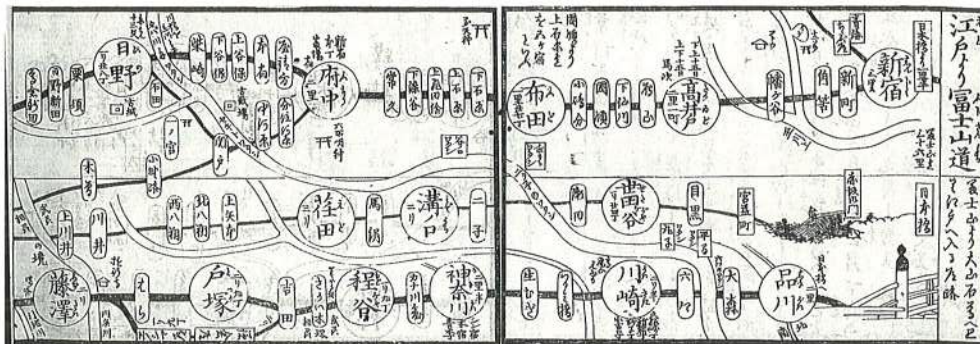
吉田へは、かつての富士講中は江戸から富士山道を通って富士登拝にやってきた。江戸やその周辺からまったくの徒歩で遠い道程を歩いてきたのである。江戸時代末期の富士山御縁年である万延元年（1860）に版行された『富士山道しるべ』は、「江戸より富士山道」を「富士山迄三十六里」とし、日本橋から甲州街道を辿り、大月宿で分岐して富士山へと

向かう道を総称して富士山道としている。

また、それとは別に「富士より大山石尊へ廻り江戸へ入る道路」を併せて掲げている。ここでは『富士山道しるべ』に掲げられた記述と現状を併記して並べることにし、実際に旧来の道がどの程度歩けるものなのかを含め、江戸（東京）からの富士山道を紹介することにする。

なお、今回利用した写真は、富士吉田市企画課が平成10・11年の2か年にわたって実施した「富士道あんぎゃ」の折に撮影されたものである。この事業は江戸日本橋からかつての甲州街道、谷村路（富士道）を利用して富士山にいたる「富士山道」を徒歩でたどることを目的に実施され、ここでは最大限旧道を歩くようにつとめた。

新宿～日野



新宿～布田／『富士山道しるべ』

新宿

日本橋から一里半で新宿に着く。高井戸へは三里あり、その間に新町、角筈、幡ヶ谷がある。角筈と幡ヶ谷の間の川に橋が架かる。また、幡ヶ谷の先で玉川上（水）を橋でわた

る。新宿追分をそのまま行く道が青梅・ち、ぶ道（青梅街道）で、十二ソウ（十二社・熊野神社）には鳥居とイケ（池）、その西にはフトウ（不動）がある。

起点の日本橋から新宿までは一里半（六キロ

▼博物館レポート～「富士山道しるべ」を歩く(前)



【鉄砲洲での初拝み】

メートル)の距離であり、そこからは新町(新宿三・四丁目)、角筈(西新宿)を経て、淀橋川を板橋でわたり、幡ヶ谷へ出て玉川上水を過ぎ、高井戸へと向かう。

現在の新宿の中心は、むしろかつての宿外の角筈にあたる新宿三丁目や西新宿となっており、全体に西側にずれている。旧来の東京十五区でいえば、後に四谷区に編入された本来の新宿から、新宿駅の設けられた淀橋区角筈方面へと重心を移したことになる。新宿通りを新宿三丁目の追分交差点で左折し、天龍寺の前まで行き、そこを今度は右折して新宿駅を跨ぐ甲州街道の高架橋を越えて西口方向に道を取る。ここを歩く場合には、歩道はその先の休憩地や夏の陽射しなどを考えて、南側・新南口側を歩く方が都合がよい。

駅西側で渋谷区に入り、初台まで交通量の多い道を進んでいく。しばらく行けば、玉川



【新宿駅前に行く】

上水を埋め立ててその跡地を利用した带状に細長い公園があり、そこには水飲み場やトイレなどの施設が設けられている。休憩のほか、昼食を取ることができる。しばらくは甲州街道と接して带状に玉川上水の緑道が続くので、そこを歩くことも可能である。

京王線に沿って、甲州街道を西へ西へと進

んでいく。明大前を過ぎるくらいまでは、人通りや交通量がきわめて多い道で、人波をかきわけるようにして単調な江戸時代からの街道を辿ってゆくことになる。

高井戸

五街道の他の街道は、日本橋を起点として二里のところに最初の宿場が設けられたが、甲州街道だけは四里のところにあった。高井戸宿は上高井戸・下高井戸の二宿で一宿役とされ、交代で宿場の役を務めた。内藤新宿ができると、次第に衰退した。そして、一時廃止となっていた同新宿が再興されてからは、急速に凋落した。

高井戸は二里一町で次の布田宿と結ばれ、「下上十五日、上下十五日」、つまり下高井戸が上旬の一五日間を、上高井戸が下旬の一五日間をそれぞれ担当していたことを記している。「馬次(継)」場であり、そこから烏山、下仙川、国領、小島分を経て布田宿へと向かう。

現在の下高井戸は、交通量の多い街道に沿っていくつかの寺院があり、短冊型に地割された町並みが続き、かつてここが宿場であったことを物語っている。この付近は、杉並区と世田谷区が入り組んでおり、詳しくみると、杉並区の範囲が下高井戸宿にあたることからわかる。その先で、烏山と道路標示が出ている旧甲州街道に折れる。旧道の両側がかつての上高井戸宿である。江戸時代のうちにすでに宿場としては落目であった上・下高井戸宿は、歩きながらみる限り、地割以外には宿場の面影を残すものはほとんどみられない。

烏山は甲州街道の間宿となっていた。さらに下仙川、国領と間宿が続いている。

前にも述べたように、上高井戸で現在の国道20号線から旧道に曲がり、そのまま進めば



【仙川付近の甲州街道に行く】

▼博物館レポート～「富士山道しるべ」を歩く(前)

烏山である。京王線の千歳烏山駅入口に小規模な公園がある。そこには水飲み場とトイレがあり、休憩に便利である。そこを過ぎると、旧街道の面影が比較的残されている道を辿っていく。途中に小川があり、多少上り下りする道を仙川へと向かう。

再び国道と合流するあたりが世田谷区と調布市の境界となっている。国道20号沿いに進んでいく。この付近がかつての下仙川である。しばらくいくと、道の反対側に小区間ではあるが平行する旧道・滝道が分岐する。この道を通るには、歩道橋をわたって北側の歩道を歩かなければ、その道に行くことができない。南側の歩道に行くほうが便利なのでそのままいきたい。



【滝道付近の甲州街道に行く】

布田

国領から上石原までは五ヶ村一宿で、「国領より上石原を五ヶ宿といふ」とし、それらは国領・下布田・上布田・下石原・上石原の五ヶ村にあたる。布田から府中までは一里廿七丁とされ、下石原、上石原、上飛田給、下染谷、常久をはさんで、府中に通じている。布田の宿北側にはフダ天神（布多天神社）が祀られる。

京王線調布駅のそばに京王線と平行して走る旧甲州街道から、北方向に引き込まれた長い参道を歩くとその奥に布多天神社がある。調布の鎮守社となっている神社である。

府中

府中宿は、新宿・本丁・番場宿からなっており、六所明神（大国魂神社）が祀られる。府中より屋敷分、本宿、上谷保、下谷保、柴崎、日野と二里の長さで甲州街道は続くので

あるが、府中で南に折れる間道がある。分倍河原、中河原と進みタバ川（多摩川）をセキトワタシ（関戸渡し）でわたって関戸へ出て、一ノ宮からアサ川（浅川）を越えて石田へ向



【天保天神にて小休止】

かい、日野へと辿る道であった。途中の分倍河原には古戦場がある。本来の甲州街道は柴崎まで行って、タバ川の日野の渡しを「舟ちん十三文」で「舟ワタシ」に越して、日野宿へと向かうものであった。

現在、多摩川に架かる立日橋が、日野の渡しにもっとも近い場所にある橋であろう。そのため、国道20号の日野橋交差点をそのまま柴崎まで進んでから左折して立日橋をわたるのが、本来の道筋に沿っているといえよう。また、富士山道を何日かかけて連続で歩く場合には、最初の宿泊を調布から府中の間ですることになる。

日野

日野から栗須、日野新田、高倉新田、上大和田を経て道は八王子に続くが、その距離は「一里廿八丁」であり、上大和田の手前でアサ川をわたる。

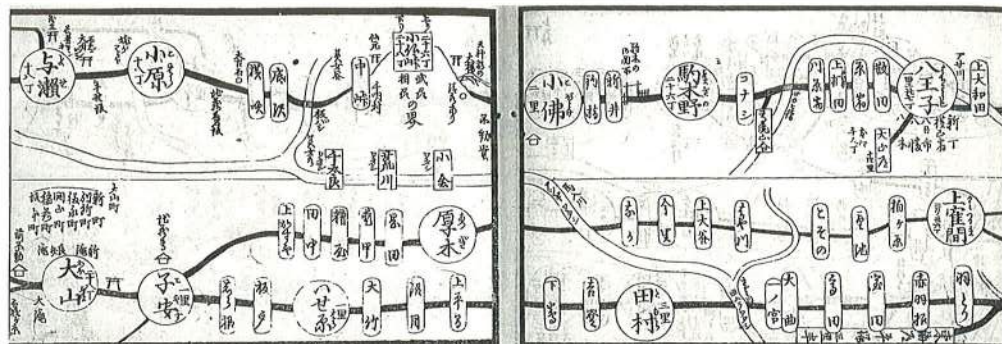
日野駅前から現在の日野坂を登りあげ、そこからは日野台地上の現甲州街道を往くことになる。



【日野橋付近の公園で休憩する】

▼博物館レポート～「富士山道しるべ」を歩く(前)

八王子～与瀬



八王子～与瀬 / 「富士山道しるべ」

八王子

八王子宿は第六番目の宿場である。宿は新丁・横山宿・八日市・八幡・八木に加え、本郷・千人丁からなっていた。駒木野まで一里廿七丁で、ここから大山道が分岐する。道はここから散田、原宿、上栲田、川原宿をへて、その先で再びアサ川をサカヒ橋（堺橋）でわたり、コナシ（小名地）の手前で高尾山への道を分ける。

現在、蛇滝に茶屋がある。江戸時代には、この茶屋は小仏峠の頂上にあっただのであるが、その後現在地に降ろされている。二泊目の宿泊は、高尾から相模湖までの付近で行うことになる。

道となる。駒木野のはずれには関所跡が残っていて、小規模な史跡公園に整備されている。休憩にはよい場所である。



【駒木野付近に行く】



【高尾駅前に着く】

小仏

小仏から小原までは二里の距離がある。小仏峠への「上り二十六丁、下り二十八丁」を上下する。小仏には不動堂が存在し、「清水あり」と書かれたその先は、天神杉の大橋である。峠は「武州 相州の界」となる。小仏峠、中峠、底沢、横吹、小原と続く。峠の反対側には仙元（浅間）が祀られ、中峠、千明村を過ぎ、美女谷から流れてくる川に架かる板バ

駒木野

ここから小仏までは二十六丁で、「駒木の御関所」がある。間宿の新井、釣橋から小仏へと向かう。

国道20号は、中央線のガードを潜り、そのまま大垂水峠へを越すルートをとるが、旧道は堺橋の先で左に折れて小仏峠へと緩やかな登りとなる。ここからは、きわめて単調な倉



【雨中の小仏峠越え】

▼博物館レポート～「富士山道しるべ」を歩く(前)

シ(板橋)をわたって底沢で、横吹を過ぎると大たね、地藏尊坂を下って小原に着く。

裏高尾町と呼ばれている小仏峠への谷には、旧甲州街道と中央自動車道が平行して走っている。長いアプローチを歩いて、中央道の高架橋をわたれば小規模な広場があり、舗装が切れる。自動車での通行はそこまでで、ここからは徒歩でのみ通行可能な山道になる。杉木立の中を、川のせせらぎを聞きながらの道行きは、気持ちがいい。約30分歩くと、峠の頂上に出る。茶屋が一軒営業していて、その真中の通路を通って行くと相模湖に降ることができる。峠の稜線は東京都と神奈川県との都県境になっている。

小原

小原から与瀬までの両宿の間は十八丁である。姥がフトコロ(姥ヶ懐)から年野坂を下っていく。

小原宿の本陣は今日まで存続し、一般に公開されている。国道20号によって宿の通りは拡幅されているものの、ここは宿場の面影を比較的良好な形で残している。



【宿場の面影を残す小原宿】

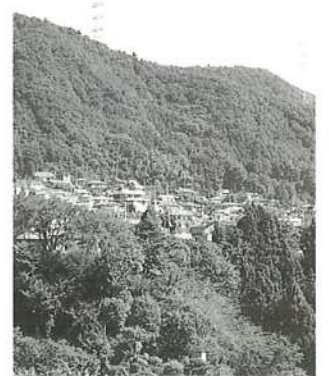


【小原宿本陣】

与瀬

小原からしばらく行きと与瀬宿に着く。与瀬から次の宿である吉野までは同様に十八丁で、川越えの道と「馬道半里」を往く道と二つの道筋がある。与瀬にはアタゴ大明ジン(愛宕大明神)、長者ヤシキ(屋敷)、「蔵王」祠があり、そこから川(相模川)をフタセゴヘワタシ(二瀬越渡し)で南岸の日連村へわたる。そして、カツセ(勝瀬)を過ぎ、タンダ前ワタシ場(丹田前渡し)で再び北岸に戻って吉野に向かう。馬道半里の脇道は与瀬から横沢を目指し吉野にいたる道である。

江戸時代の道筋には、相模川をせき止めて相模ダム(相模湖)が建設されており、川越えの道は通行することができない。そのため国道20号を行くのが一番確実な方法である。交通量がきわめて多く、歩道が設置されていない部分があるので、十分に注意をして通ることが必要である。



【与瀬(相模原町)の遠望】

*今回は、新宿から与瀬(相模湖町)までの区間を紹介した。次回は吉野(藤野町)から山もとの吉田(富士吉田市)までの道順を後編として示すことにしたい。

甲州街道についてのさらに詳細な情報をお寄せいただければ幸いです。

<学芸員 堀内真>

▼活動報告

企画展・博物館講座

企画展

● 写真展『富士山の四季』

平成11年4月28日(水)～6月15日(火)
四季折々に移り変わり、様々な表情を見せる富士山。その雄大な富士をとらえた写真家飯島志津夫氏撮影の写真24点を展示しました。



● 巡回展「山梨の遺跡展'98」

平成11年6月29日(火)～7月25日(日)
山梨県内では毎年多くの遺跡が調査され、次々と新たな発見がなされています。富士吉田市内にも数多くの遺跡が残されていますが、発掘調査そのものが少なく、身近に触れる機会がありません。この展示は山梨県埋蔵文化財センターの協力を得て、平成10年度に調査された新発見の資料を写真や解説を交えて紹介しました。多くの方が訪れ、県内の幅広い歴史を知る良い機会となりました。



● 「絵葉書に見る富士登山」

平成11年8月8日(日)～9月26日(日)
古来より富士登山は『富士参詣』ともいうように信仰を目的としたものでした。この企画展では、江戸時代までの信仰登山一色から脱却した明治以降の登山の様子について、その時代を写し込んだ絵葉書を中心に紹介しました。
登山記念のお土産として登場した絵葉書は、当時の富士山の様子を知ることができる数少ない資料であり、富士登山史の移り変わりを知る良い機会になりました。



博物館講座

● 「縄文土器作り教室」& 「作品展」

平成11年8月1.8.15.22日 毎週日曜日
8月24日(火)～28日(土)
夏休み期間中を利用して、今年度も縄文土器作り教室を開催しました。粘土練りから焼き上げまで、全3回の工程で多くの参加者が縄文土器の製作に取り組みました。作品はどれも力作ぞろいで、誰一人割れることなく作りきることができました。

作品は24日～28日の間、博物館廊下にて展示しました。参加者以外の方にも興味を持っていただけたのではないかと思います。



【野焼きの様子】

▼Information

博物館からのお知らせ

催し物

次回
企画展

臨時休館のお知らせ

編集後記

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地帯を指すこの地方のことば「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化（変化）したものとされています。

●第47回富士吉田市文化祭

博物館エリアにて文化祭出展作品を展示します。
ぶんきょうフェスティバル

(平成11年11月23日)

内容	会場	期間	時間
虹彩会展	企画展示室	23日	9時～5時
いけ花教室	ロビー・ラウンジ	23日	9時～5時
茶会	御師住宅	3日	10時～3時
郷土史講座	講堂	3日	10時～12時

富士こぶしの会

(平成11年11月67日)

内容	会場	期間	時間
新田次郎文学展	企画展示室	6.7日	9時～4時30分

※文化祭についてのお問合せ

市教育委員会文化振興課 TEL 0555-22-1111

●『富士吉田市収蔵美術品展』

平成11年11月16日(火)～12月19日(日)

富士吉田市では、市民の文化振興に寄与するため、文化的価値の高い美術資料を収集しています。この美術品展では、これまで収集した絵画の中から、富士吉田市はもとより日本のシンボルでもある富士山を画題として描かれた作品を紹介します。

(問合せ=市教育委員会文化振興課)

●『馬返しの今昔』

平成12年1月20日(木)～3月15日(水)

吉田口登山道の馬返しは、平成9、10年と発掘調査が行われ、当時の馬返しの実態が次第に明らかになってきました。古来より富士山の入口に位置する重要な信仰施設であった馬返しにスポットを当て、その歴史の変遷を紹介いたします。

臨時休館のお知らせ

博物館では、貴重な資料をカビや害虫から守り、永年に渡って保存していくために毎年

燻蒸作業を行っています。燻蒸期間中は閉館となります。

燻蒸休館期間 平成12年1月4日(火)～10日(月)

博物館はアカマツ林のなかに立地しており、春から秋にかけて多量の花粉と松脂をばらまきます。その量たるや半端なものではなく、車や施設は、粒状に落ちてくる脂や花粉でベタベタになります。何ヶ月にも亘って落ちてくるため、何度車を磨いても翌日には脂の襲撃を受け、可哀相な姿に変わってしまいます。

愛車家の私個人としては、辛い追いかけてこの毎日ですが、檜丸尾溶岩流下後、千年の永きにわたり根を張って生きてきた赤松に対して私達が文句を言える筋合ではありません。

自然の営みには敬意を表し、この豊かな赤松林を大切にしていきたいと思えます。

(FU)

ご案内

開館時間 午前9:30～午後5:00(入館は午後4:30まで)

休館日 月曜日(祝日を除く)
祝日の翌日(日曜・祝日を除く)
12月28日～翌1月3日

観覧料 大人 300円(240円)
小中高生 150円(120円)
()内は20名以上の団体料金

交通案内 ●中央自動車道河口湖ICより車で10分。
●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車。

富士吉田市歴史民俗博物館
FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 2288-1
TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665
E-mail marubi@mfi.or.jp
2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005
博物館 ホームページ URL
http://www.mfi.or.jp/marubi/

発行 平成11年9月30日